
マレビト来たりて 前編

安積

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビト来たりて 前編

【Nコード】

N0495BA

【作者名】

安積

【あらすじ】

典型的異世界トリップ……なんだろうけど、何でこの人たちこんなに異世界人慣れしてるわけ？

数ヶ月という短周期で異世界から人やら何やらがやってくる世界に、何の因果かやってきてしまった日本人が、何とか順応しようと頑張っ
って生きていく話。

同名投稿小説の、改行修正、分割話統合版です。第6章分までをこ

こちらにまとめていきます。内容は全く同じです。

序章

勢い込んで家を出た、初出勤のその日。

慣れないスーツに着られてる感は否めなくても、それでもやる気だけは一杯で。

意気揚々と家を出た。

ほんの少しの不安と緊張とそれに勝る多大な好奇心を胸に。

それなのに。

どうして私は異世界ニホにいるんだろう？

意外に落ち着いてるもんだよね。

ただの娯楽でしかなかったファンタジー小説もこんな風に役立つことがある訳か。

予備知識も何にもなしにいきなり異世界に来ていたらきつとパニックを起こしてただろう。

もしかして、昔から神隠しの話があつたのってこういう現象に巻き込まれる人が実際にいたからなんじゃないだろうか？

となると、あくまで楽観的な予想に過ぎないけれど、場合によっては帰れることもあるわけで。

でも、逆に言えば万が一どころでなく低い確率だけど、ここから更に別の世界に行ってしまう様な可能性もある訳か。

二度あることは…とも言うし、とりあえずは帰れるかもしれないけどこの世界での生活の目途をつけることが重要な？

となれば、まずは職探しか。

……結局、辛い就活から逃れられてもまた職探しな訳ね。
この世界にハローワークみたいなものはあるのかな？

異世界初日。

訳の分からぬままに保護された神殿で、空に浮かぶ7つの月に眩暈を覚えながらも、微妙に現実逃避をした脳は眠りという精神安定剤の補給に異議を唱えはしなかった。

序章（後書き）

2012/01/06 ルビ訂正

何の因果か異世界に来て、早1週間が経過した。因みにこの世界での1週間とは6日のことで1月は24日である。

まあ、それはどうでも良いが、何とか現状を把握し慣れてきたかな、といったところだ。異世界トリップものでは時たまあるバージョンだが、この世界は「渡り人」に慣れているようだ。「渡り人」って言うのは私のような異世界からやってきた人々の事らしい。

別名「マレビット」。

これはこの国、アウトラーシェン周辺でだけ通用する言い方らしく、あまり一般的ではないのだそう。

話が逸れたが、何でも、毎年或いは数年に一度何処かしらには「渡り人」が現れるのだとか。しかもこの国だけじゃなく、他の国でもそうらしい。恐らく、この世界全体で見れば数ヶ月周期で渡ってくる人がいるのではないかと、私を保護してくれた神官が教えてくれた。しかも、やってくるのは一つの世界に限らないらしい。私と同じように地球から来る人もいれば、別な世界から渡ってくる人もいるとのこと。人に近い種もいれば、所謂獣人や竜のような生き物である事も。人種の坩堝やサラダボールなんて比ではない。

ある人はまるでゴミの集積場だ、と自嘲気味に言ったらしいが。

どうしてこんな事になっているのかは大分前に判明している。嘘か本当か定かではないが、かつて神託が下ったのだという。

曰く、この世界に必要なでありそうな人材を見繕って集めているのだ、と。

世界で生まれた人たちも元を辿ればそうやって集められた人たちの子孫なんだとか。この神託を受けたのは特に信仰心が篤いというわけでもない、どこにでもいそうなおっさんで、神託を受けてからの開口一番の言葉が「余計なお世話だクソっ垂れ」だったと伝わっている。なんでも、神託が下る前年に新たにこの世界に落とされた

竜によって最愛の息子を殺されたばかりだったとか。

神と人間の価値観は違う。人にとってはふざけたことでも、神にとってはこの世界が完成するのに必要な処置だったという事だろう。今でこそもっと積極的にこの世界に関わりを持つている神だけれど、このときはまだ意外と放置気味だったらしい。それにも拘らずこの話が信じられたのは、そのおっさんのように神なるものももし実在するならば確実に恨んでいるだろう人々を中心にその神託が下ったからだ。一人が言ったただけならただの戯言でも、証人が複数いれば信用される。多くの証言者がいながら、何故かその中には一人も聖職者がいなかった。それ故、なぜ自分に託宣を下さらなかったのかと嘆いた聖職者も多くいたとか。

私が思うに、信心の篤い聖職者に神託を下したところで信憑性が薄かったり、変に歪められてしまうと心配したんじゃないだろうか。どこことなく、この世界の神様は人間臭い気がした。とにかく、それらの証言の数々は神殿に集められ、一冊の本としてまとめられた。今では世界中の誰もが知っている内容だが、世界は変われども噂とは人の口に膾炙されやすいものらしく、実は公にされてない神託があるのだ、世界の終末の預言があるのだの様々な都市伝説も合わせて広まっているらしい。

この手の噂を最初に広めたのはアメリカ人の「渡り人」ではないかな、と思ったりするが、それは私の勝手な想像だ。でも、アメリカ人ってそういう政府陰謀系の都市伝説好きだよな。

まあ、伝聞が多くなったがそんな訳で「渡り人」たちはこの世界では当たり前な存在なのだ。だから「渡り人」を迫害したり逆に優遇したりするような事はないが、普通に生活していこうと思えばそれほど困りはしないだけの制度作りはされていた。

「渡り人」が世界に必要な存在であると神から言われていることもあり、まずは何が出来るか、どのような知識や技術、能力を持つ

ているかという事が調べられる。そこで特別なものを見出されれば、研究機関やら何やらで仕事につく事も出来るが、そういう人物はあまり多くはない。大抵はギルドにて自分のできる仕事を斡旋してもらう事となる。

そう、ギルドだ。

異世界トリップおよびファンタジー世界のファンが垂涎のギルドである。もしかしたらこの仕組みはゲームやラノベ好きな地球人が考えたんじゃないのか、と思うほどその手のギルドに良く似ている。間違っても、中世以後のヨーロッパでの商工会としてのギルドのあり方ではない。

何と言うか、分かりやすく現代の言葉に直すなら職業斡旋所…といってもハローワークではなく、人材派遣会社とでもいった感じだろうか。そうあれだ、携帯ですぐ登録、週末には日雇いのバイトというグツ。ウイ。やらモ。イトやらそんなのとよく似ている。

ギルドに登録したら、自分が請けることの出来る仕事の候補の中からやりたいものを選んで仕事に行き、仕事が終了したらまたギルドに戻って報酬を得る。安定した生涯雇用（バブル崩壊以後有名無実となつてはいるが）が当たり前だった現代日本人からすれば、職業に貴賤はないというものの、日雇い労働者というのはかなり心理的抵抗のある職業である。というか、そうならなかったために大学まで苦勞して通って、就職難が叫ばれる中、それでも頑張つて内定を得て、何とか無事に卒業して、今日から初出勤！という日に異世界なんぞに落とされて、拳句に別段特出した能力もないようだから日雇い労働に甘んじろ、というのはハッキリ言つて、神がいるものなら極刑ものだと少なくとも私は思う。

それでも、生きてく為にはそれしか出来ない。この中世的世界、安定した雇用を得るにはコネと伝手が何よりの頼りなのだ。異世界からやってきたばかりの根無し草にそんなものはない。ギルドでコツコツと信用を溜め、誰か自分の能力を買ってくれる人を見つける

か、売り込んでいくしかない。

と、まあ。

異世界に落ちてきてから保護された神殿で、1週間くらい掛けて色々教えてもらったり調べられたりして現状を把握する事は出来た。短い時間ではあったが保護される期間は今日で終わり、明日からは私の身は神殿ではなくこの区域担当のギルド預かりになるらしい。

結構無茶な話だと思うだろうが、これらは良くも悪くも私たちのためのことなのだそうだ。何も知らないまま放り出すわけには行かず、かといって長い時間保護してしまえば自立しこの世界に馴染む力をなくしてしまう。ある程度落ち着いて自分の状況を把握して、且つ自分で世界に踏み込んでいく力も持っている。その微妙なラインが凡そ1週間だったのだという。これは神々がある程度、順応性やある意味での凶太さをもった人間を選別しているからこそできることらしい。つまり、この世界に来てしまった私はとつても凶太い神経の持ち主だという事を証明されたようなものである。これを言われたときは流石に少なからずショックを受けた。もしかしたら、この世界に来てしまったということ以上のショックかもしれない。

……恐らく、こういうところこそが私が選ばれてしまった所以の一つなのだろう。

明日、朝になれば私は神殿の庇護下を離れ、異界の地で自ら歩く術を身に付けていかなければなくなる。当分、心休まる日はないだろう。こういうときは体力温存に限る、とばかりに異界の夜に浸るまもなくさっさとベッドに潜り込む。新生活への多大なる不安と若干の好奇心と興奮を闇は飲み込み、夜は静かに更けていった。

異世界生活7日目。

庇護下を離れ、自立生活を目指して活動するという意味では実質1日目とも言えるだろう。まあ、1週間というのはあくまで目安であって体調やら精神状態やら多くの理由で保護期間が長くなる人はそれなりにいるらしい。私ももう暫くいても良いのだと言われたけれど、一度甘えればきつと離れられなくなる、そんな自覚がしつかりあった。それに、本来であれば1週間前には新入社員として自立生活をスタートさせていた筈なのだ。例え異世界だとしても、私がすぐに働く道を選んだのはある意味当然の選択と言えただろう。

でも、本当の理由は……。

「本当に登録してしまっているのですか？」

ギルドへ向かう道すがら、この1週間私の保護官であった神官がしつこく尋ねてきた。そう聞かれてしまう理由は分からなくもなかったが、一度決めた事をグジグジといつまでも言われ続けるのは不快だった。

「もう、決めました。」

自然、言葉はそっけなくなる。

それでも、否^{いや}それだからこそか、強がっているように見えたのかもしれない。結局、ギルドへの長くはない道案内の間に15回も同じ質問が繰り返された。曰く、その年では仕事はまだ無理ではない

か、体力的に持たないのではないか、無理をしているのではないか、たった一人で食べていくのは難しい、もっと我々を頼れ、組織が嫌なら自分が個人的に面倒を見よう、否寧ろそれが良い、だのと。まあ、どれも丁重にお断りしたが。こんな暑苦しく押し付けがましい保護者は不要である。

暑苦しいとは言うものの、顔だけ見れば……ゆるく一つにまとめられた柔らかに波打つ稲穂色の長髪、瞳に映すは冬空の青、コーカソイドに近い色白の肌はム力つくくらいにつるつる、顔のパーツの形も配置も抜群、とくれば……まあ、間違まちうことなき美形であるう。もし私が男だったなら、確実に「イケメン死ね」とか思ったことだろう。「リア充爆発しろ」と、思うことはなかっただろうが。何せ性格が……これこそが所謂残念な美形と呼ばれるそれなのだと思う。

そんな美形に、たとえ多少しつこいとは言え見知らぬ世界でそんなに親切にされたらころつとオチてしまってもおかしくは無いとも思うのだが、彼に限ってそれだけは在り得ない。私を神の遣いとしてしか見ない相手に、どうして恋情など抱けるだろう？彼が私に優しくするのは、偏に私が神が遣わした「渡り人」だからである。それが分らないほど、私も愚かではないし、それを分って尚甘える事ができるほど厚かましくも無ければ、この世界を受け入れていたわけでもなかった。

やがて静かになった神官を先導にギルドらしき建物へと到着する。見るからに過ぎた年月を感じさせる石造りの重々しい雰囲気建物だ。

「ここですか？」

すべての提案をすげなく断られたせいか幾分意気消沈して見える神官を見上げ、尋ねる。神官はまだ未練がましい瞳を向けてきたが、事ここに至ってはもう反対する気はないようだった。

「そうです、ここがエグザードナ地区のギルド本部です。」

そう言うのと重厚な重い木製のドアを開き、私が入るのに続いて中へ入ってきた。どうやら私の登録が終わり、完全に神殿の庇護下を離れるまではついてくると決めているようだ。なんて過保護なのだろう。普通は道案内されたらそこで終わり、或いは場合によっては地図だけ渡されてそれで終わりという事もあるらしいというのに。それはそれで困るのだが、逆の意味でとんでもないのが保護官だったなと、後僅かで彼との縁が切れることを神ではない別の何かに感謝しつつ、気づかれないようにそつとため息をついた。

早朝と呼ぶほどではなくとも早い時間だからか、ギルドの中は閑散としていた。日本の日雇い労働のイメージだと、朝早くに仕事を貰って夕方帰ってくる、という生活パターンかと思ったのだが、どうやらギルド員たちの朝はそう早くないようである。それでも、少ないとはいえ奇異なものを見る複数の視線を寄せられている事は分かった。それらの視線の持ち主をやり過ごし、幹旋内容を記した掲示板やら、おそらく受付か換金用であろう窓口を通り過ぎ、階段を上り2階へ向かう。本当に、想像していた通りゲームや小説の中のそれにそっくりだ。「渡り人」は元の世界の時代を問わずやって来るらしいから、あながち私の予想は外れていないのだと思う。特に、この国は地球からの「渡り人」が多い事で知られているということだから。

通常、ギルドの登録は1回の窓口で行われるのだという。しかも地区内にあるギルドの各支部でも登録は可能だそうだ。本部よりも

窓口が込む事も少ないので、この近辺に居住しているものでもなければ、そちらで登録する者の方が多いようだ。

だが、唯一例外がある。

異世界からの「渡り人」だけは、その地区のギルド本部の上層部でなければ登録できないのだそうだ。それは時折、後になって能力を開花させる「渡り人」も少なくないため、その管理を行いやすくするようにという理由によるのだとか。更にはまだ世界に慣れない「渡り人」の援助をしやすくするための決まりでもあるそうだ。確かに、お互い顔見知りであつた方が何かと便利だろう。

階上上がり、薄暗い廊下を進む。神殿や離宮もそうだったが、ガラス窓の少ない石造りの建物は総じて日中でも暗い。神殿はそれでも白い反射率の高い石を磨き上げて使っていたのでまだ少しは明るかったが、ギルドでは削り出しそのままの石を使っているのではおさらに暗く感じた。無骨な作りは威圧感も感じさせるが、恐らくはそういった効果をもたらすためではなく、経費面での理由故なのであろう。

まあ、それはさておき。

暗い廊下のその先には細かい装飾の施された大きな扉があつた。そこがこのエグザードナ地区担当ギルドの中枢だった。

ノックの後、保護官が先に入室する。

「神殿の者だ。先だつて連絡した」渡り人」の登録に来た。」

入りなさい、と姿は見えないが、それなりに年の行った落ち着いた感じの女性の声が聞こえた。

「…………え？子供？」

入室を促す声に従って入った私の耳に一番に飛び込んできたのは、挨拶でもなんでもなく、気の抜けたようなそんな言葉だった。どつしりと重そうな執務机の向こうにいる女性も若干ビックリしている。だが、どうやら先の発言はその隣にいる秘書らしき若手の女性のものでようだ。既に連絡は言っていたはずなのだから、そこまで驚かなくてもいいと思うのだが。

「部下が失礼を。けれど、言い訳になってしまいますが、話には聞いていたものの、これは驚くな、という方が酷というものでしょう。」

奥の執務机から初老の女性が立ち上がって声を掛けてきた。彼女がギルド長なのであろう、落ち着いた雰囲気、しかしそれだけではないだろうことを伺わせる独特の雰囲気、女性の女性だ。

「御挨拶が遅くなり申し訳ありません。エグザードナ地区ギルド支部長のハーナン・エルドです。はじめまして、異界から参られし方。」

「はじめまして、”渡り人”アトルディアです。」

ギルド長からの挨拶に対し、未だ言い慣れぬ名を返す。当然、偽名である。というか、正確に言うならば字、名乗りの為の仮名^{かな}といふべきか。この世界、否、^{いな}この国はかつて言霊信仰が盛んであっために今尚その名残として真名^{まな}信仰が強く残っている。そんな土地柄ゆえに、この国の出身者は本名を初対面の相手に教える事はまずな

いのだそうだ。

だが、どうやらこの支部長は異国の出身であるのだろう、恐らく先程の名乗りは字ではない。何故なら、通常字に姓がつくことはないからであり、また非常にシンプルな名であったからである。真名信仰の盛んなこの地の人々の名前は、字に限らず本名もまた自らを守護する神々や精霊の名を組み込むために非常に派手派でいい名前なのだ。私が名乗ったアトルディアもまた、そういった意味も込めて神殿から与えられた「渡り人」としての公の名である。純日本人が名乗るには似つかわしくない名だが、致し方ない。通り名は好きないように付けて良いと言われており、普段からそう呼ばれるわけではない事だけが救いである。

「アトルディア……ああ、町の北西にある滝の名ですね。元はそこに住む精霊の名だとも伝えられていますが。貴方はあの場に」渡られたのですね。」

「はい。」

渡り人の名の多くは落ちた場所に由来するらしい。その土地土地の神々や精霊が私たちに加護を与えるからだとされている。私も例に漏れず、落とされてプカプカ浮いていたその滝の名を与えられたのだ。元がその滝の精霊の名が由来であるから丁度良いだろう、とのことだ。そんな適当で良いのか、と思わなくもないが、神殿の偉いさんがそう言ったのだからきっと良いのだろう。

それにしても、と彼女は続ける。

「先程部下の非礼を詫びたばかりではありませんが……実年齢は二十二だと言われましたか。」

「はい、今はこんな形^{なり}なので信じ難いでしょうが。」

「そうですね、”渡り人”が非成人である事はないと知っていなければ納得できなかったでしょう。それを分つていても、失礼を承知で申し上げれば十を越えているようにには到底見受けられません。」

まるで幼子を見るかのような――実際彼女としては似たようなものだったのだろう――柔らかな微笑を浮かべられてはなんとも言いようがなかった。

「……十歳以下、ですか。体感的には十三歳の頃の頃とそう変わらないように感じているのですが。」

純粋な子供にしては早熟に見られるであろう苦笑を浮かべつつ、そこだけはしっかりと主張した。もはや異世界トリップのテンプレではあるが、この国の人たちの多くが地球でのコーカソイドに近い事からも、より幼く見られるだろう事は十二分に有り得ると予想してはいたが、人からはつきりそう言われると地味に堪えた……。

私だって、好きで子供になったわけじゃないんだい……。望まぬ異世界トリップの上にガキ扱い……。本気でイジケても良いだろうか？

私はこの世界に来たときに子供の姿になっていた。恐らくは十二、三歳くらいの頃とほぼ同等の身長なのではないかと思う。中一の時には身長伸びは緩やかになっていたし、以前よりは微妙に低く感じる視点からして然程ズレはないだろう。どういう原理かは分からないが、この世界にくるにあたって体はこの世界に最適化されるのだという。言語なども通じるのもその最適化された結果によるものなのだとか。通常は容姿がそう変わる事もないらしいが、極稀に容姿が変化する人や色彩が変化する人、中には種族すら変わってしまう人もいるらしい。そういう意味では、ただ単に若返った私はまだましな方であろう。

ギルドに登録するのに外見年齢では年齢制限に微妙に引っかかるが、実年齢は二十二だと伝えてあるので書類上は一応問題ない。その事はちゃんとギルド側にも伝えてあったはずなのだが、聞いてはいてもやはり実際に目にするのでは違うようだ。何より、私のように若返った”渡り人”も前例がなかったわけではないようだが、どちらかといえば珍しい部類であり、尚且つ成長を待たずにすぐにギルドに登録したものはほとんどいなかったと聞けば、なるほど、先程の驚きもおかしなことではないのだろう。そして、神殿の関係者が口をそろえてまだ早いのではないかと言っていたことにも頷けた。尤も、だからといってギルド登録を辞めるつもりは毛頭ないが、ギルド長もその事は分かってくれているみたいだった。

私を子供呼ばわり（外見はまさしく子供なのではあるが）してくれた若い女性——ミリアナ・ファレルというらしい——の淹れてくれたお茶を飲みながら話を進める。

とりあえず、私に関する簡単な説明、神殿で受けたさまざまな検

査や出身地、境遇に関してなどを話し終わると、早速登録のための書類を持ってきた。書類に印字されているのは日本語ではなく、それ以外の私を知る地球の言語のいずれでもなかった。だが、私はそれを読む事が出来た。この1週間のうちに神殿で教えられた事によれば、先に言った身体の最適化に付随する能力なのだそうだ。その人物が元々持っていた知識にこの世界のそれに同等する知識が関連付けされるのだと言う。

例えば元の世界で読み書き会話が出来れば、こちらの世界でも落ちた地域の国の主要言語の読み書き会話が出来るといったように。元々知っている語彙ならば理解できるが、知らない言葉を理解する事は出来ない。その点、日本人の”渡り人”は結構仕事面で優遇される事が多いのだとか。まずほぼ確実に読み書きが可能で、計算も得意、好みはどうあれ本を読む事は必要な勉強と言われれば然程苦としない。生憎、外見年齢のために当分私には縁のない話だが、日本人は各国の王族や神殿、大店に仕えることが多いのだという。これはコネも伝も何もない”渡り人”の中では異例の待遇なのだとか。いずれ身体が成長した暁には、私もそんな職場に就職できれば良いのだけれど。何せ、王宮や神殿といえれば日本で言う政府であり、行政機関だ。この世界では王族は須らく神の子孫である。そんな彼らが国の中枢であり、政の担い手なのだから、当然、親たる神に仕える神官たちは行政機関の一員、言わば官僚、国家および地方公務員である。当たり前のことながら、給料も良い。

しかし、当然の事ながら見た目子供が就職できる先ではない。体が成長するまで数年待つ？私に限ってはありえない選択だ。故に、私は自活を目指すならギルドに登録するほかないのだ。勿論、成長する前に地球に帰ればそれに越した事はないのだが。

私が契約に関する条項を読み終えたのを見計らったのか、ギルド

長が口を開いた。

「さて、そちらの契約書に著名してもらえば貴方はギルドの一員となります。既に知っているとは思いますが、そうなれば、正式に貴方の身は神殿の庇護下から離れ、我々の預かりとなります。とは言っても、先程も説明した通り暫くの間は僅かではありますが最低限の生活を保障するだけの金銭、或いは物資が神殿から支給されますが。それでも、今までのように神殿が何から何まで全て面倒を見してくれるという生活は出来なくなりますよ？ 本当に、構わないのですね？」

「どちらにしても、いつまでも庇護下にいるわけには行かないのでしょうか？ それならば、私は早めに今後の生活になれておきたいんです。」

「わかりました。では、登録前に確認ですが、今の貴方には後見人はいないのですね？」

「はい。」

「この世界では、貴方の生まれた世界と違って血縁や地縁、コネや伝手と呼ばれる繋がりが非常に重視されます。後見のない身では何事もなせないその事をよく知っておいてください。では、”渡り人”の通例どおり、ギルドが貴方の後見を務めるという事で構いませんか？」

「は——

「後見は神殿で務める。」

——あ？」

はい、と言い切る前に後ろから邪魔が入った。言わずもがな、あの男である。思わず引きつった顔を取り繕う余裕もなく振り返る。顔だけしか取得がないんじゃないかなかと常々疑っていた男は、至極真面目くさった顔でのたまった。

「後見には私になる。」

「ちょっと待ってください！私はギルドに頼むつもりで……」

「これは君を神殿から出す上での条件の一つだ。」

「聞いていません！そんなの。」

食って掛かろうとする私を制し、ギルド長が口を出す。

「それは、神殿の総意と見てよいのかしら？それとも、貴方一人の考え？」

「どちらとでも。」

明確に答えはしないが自信を持って言う。だが、勘でしかないがこれはこいつの独断だ。これを言うためにここまで来たのかと、ようやく私は理解した。

「神殿が条件だというならば、こちらとしてはそれを覆す手はあまりないわ。確かに後見役としては申し分ない相手ではあるけれど……」

「……変更は、難しいんでしょうか？」

「神殿側が納得するだけの後見人を見つけるには時間がかかるでしょうね。そうなれば、ギルドの登録自体も遠のくわ。」

「……分かりました。それでお願いします。」

ギルドが単純に後見するよりもはるかに多くの優遇措置が受けられるのだから、儲けものとも思っておきなさい、他の「渡り人」がどんなに望んでも手に入らないものよ、と微笑まれては何も言い返せない。私としては苦渋の決断だ。それでも、どうしても私には早急に仕事が必要だった。頑張りなさい、とエールを送ってくれたギルド長に挨拶をし、満足げな顔の神官と共にその部屋を後にした。

帰り際、1階で早速明日からの仕事を探すため掲示板を見上げた。先程通り過ぎたときよりも好奇の目は増えていたけれど、神官がすぐそばにいる事から見る以上のことはしてこなかった。からかわれたらそれも利用してやろうかと思っていたんだけど……本当に、過保護な人だ。

恐らく、今日中には子供姿の“渡り人”がギルドに登録した事は町中に広まるだろう。多少その情報を増やしてやる事は吝かではない。とりあえず、目当ての依頼の紙を神官にとって貰う。先に窓口へと進み始めた神官の眼を盗み、窓口へ行く前に、くるっと振り返りにっこり笑って一礼をした。案の定、好奇の視線を寄せていたギルド員たちの視線はしっかりと私に集中している。神官が、私が何かをしようとしていることに気付いて止めるためか近づいてくるのが目の端に映ったが、もう遅い。声が掠れないように、就職活動で鍛えたよく通る声を意識する。

「はじめまして、ギルド員の皆様方。本日、ギルドに登録しました、

異界、地球の日本から来ました”渡り人”アトルディアです。」

地球、日本という言葉に反応した人が何人か見えた。若干、好奇の視線に好意的な色が混じり始める。これは先人たちに感謝すべきなのだろう。極力、明るい声と表情を心がけながら後を続ける。

「読み書き計算は得意ですが、今のところ特殊能力は発現しておりませんので悪しからず。こんな形ではあります^{なり}が、一応れっきとした成人ですのでどうぞ宜しくお願い致します。」

よし、ちゃんと言えた！ 内心ガッツポーズをしながら笑みを浮かべる。内容としては短めだが、気分的には就活の面接での自己アピールを無事終えたときに近い。呆氣にとられている面々を尻目に再び一礼すると窓口にとってかえした。何故だか後ろから笑い声が響いてきたが気にしない。無然とした顔をしている神官だって気にしない。

爪先立ちで背伸びをしながら――再び後方から爆笑が響いたけれど、以下略――窓口に依頼の紙と、先ほどギルド長に貰ったギルド員としての契約書の控えを出す。この契約書の控えが、ギルド証が発行されるまでの私の身分証明書となる。神殿から発行されている身分証もあるけれど、それではギルドの仕事は請けられない。故にこの一枚の紙切れは私にとっては大事な命綱だ。確認され返された契約書を丁寧にバッグにしまった。

そして説明されるのは契約の履行内容についての説明、これはもうテンプレ的な内容だから以下略。一つだけ違つとすれば、明確なレベル設定は存在しないという事。個人の力量を正確に測るのが難しい、というのは確かに理由の一つなのだが、ただ単純に必要ながない、というのが一番の理由だそうだ。

無茶だと思われる仕事なら一応ギルド側から注意が促されるけれ

ど、最終的には受ける受けないは個人の自由であり、出来なければ違約金を払うというたつたそれだけだ。それ故に失敗を繰り替えした場合、信用の失墜は免れず、その影響は大きい。仕事を請ける受けないは個人の裁量に任されるとは言え、評判が落ちれば依頼側からこの人だけはやめてくれ、と言われる可能性が出てくるわけだ。因みに、この評判は街の噂と言う形で人々の口に乗る。仕事上の信用問題だけでなく、人格の問題として扱われてしまう事もままあるため、当然無茶な仕事をする人と言うのは少なくなるので、レベル設定なんて必要ないのだそうだ。他の情報ソースがほとんどないとは言え、街の噂恐るべし、である。日本では人の噂も75日と言ったが、実際75日も仕事が出来なければ基本的に日雇いであるギルド員は日干しになってしまふ。そりゃ、自ずと気をつけるようになるってものだろう。

そんなこんなで、私も確実に出来るだろう仕事を選んだ。請ける仕事は単純に草むしり。期間は明日から1週間、場所もギルド本部近くの民家である。当然、賃金は低いが今の私ではこれがせいぜい。それでも、これが私のこの世界での第一歩だ。

神殿の保護下は安全で安心で、何もしなくても良い所だった。この世界に慣れるまで私を守ってくれた。

でも、何もせずただただ受動的にすごす日々は、ふとした瞬間に地球のことを思い返させた。両親は、兄弟は、友人たちは、一体どうしているだろう。この世界に来てしまったことを認識するのに1日、理解するのに1日、地球を諦めるのに……まだ、私は諦め切れていない、とりあえず、現状を受け入れるのに1日、4日目には地球を 思い出した。

ふとした瞬間に家族を、友人を、残してきた様々なものを思った。

早過ぎるといわれた仕事の開始。でも、私は何も思い出す暇もなくいたかった。無理無茶無謀なんて、想定のうちだ。思い出してしまえば、泣かずにはいられなかったから、周りの人に当たらずにはいられなかったから、神を憎み恨み辛みを吐き罵倒し続けずに入られなかったから、己の不幸に溺れ嘆きつづけずにはいられなかったから、誰かを傷つけ、誰かから大切なものを奪わずには、この世界を呪わずにはいられなかったから。何も感じずに眠りたかった。だから、私は小さくなった体で無理を押しても仕事を始めたかったのだ。

とりあえず、ギルド登録はなった。依頼も請けたが、仕事は明日からである。朝早くにギルドに来た為、まだ日も高い。さて次は何をするか。やりたい事は色々ある、けれど先立つものが何も無い。

そもそもこの世界に来る時に持っていたものの他は、神殿で支給された2着の服以外、何も持っていないのだ。つまり、生活に必要な様々なものが一切無い。ありがたいことに、というかよくよく考えれば当然の配慮なのだが、自活出来る様になるまでは神殿から一定額の支給がある。だが、これはいずれ成すであろう何かへの期待が担保である。未だ何のためにこの世界に来たのかすら分からず、常々平凡・平均・どこにでもある存在であることを自負し、特別な何かを成す事が出来るとは到底思えない私としては、出来ることならあまり手を付けたくはない。でも背に腹は変えられないので、最低限生活をなんとか出来るだけのお金はありがたく使わせてもらうことにする。

何も気にせず支給金を使う人もいると聞いたが、人は人、である。私がこんな考えをもつのも「他人に借りを作るな」という我が家の家訓故だろう。異世界に来たからとはいえ、いやだからこそ、20年近く刷り込まれたそれはそう易々と消せるものではない。それは私と、遠く離れた家族とを繋ぐものだから。まあ、それは今は考えまい。

今、考えるべきは…。

「まずは住居か…」

ギルドと提携している安い宿屋もあるようだが、果たして子供の姿で借りられるのか。

「まさか、引越すつもりですか？」

一人考えに耽っていたら頭上から声がした。駄目ですよ、許しません、とか何とか言ってる。ああ、まだこいついたのか。

「でも、私は既にギルド預かりの身になりましたし、ただでさえ当面の生活費は援助していただくのですから、これ以上厄介になるわけには……。」

っていうか、勝手に私をこの世界に連れてきた神に関係のある場所に長居したくはないのだ。そこにいるだけで、この理不尽に神経がささくれ立つのが分かるから。

「先程も言いましたが、我々としてはまだあなたを神殿から出すのは反対なんです。例え預かりはギルドに移ったとしても私が後見人である以上、神殿から出ることは許しません。」

私の意思を無視して勝手にあなたが後見人になったんでしょくに。私はギルドに頼むつもりでいたのに。

「正直、神殿は気疲れするのです。ただの穀潰でしかないのにあのような生活を送るのは息が詰まります。」

「それは、お役目が知れぬからですか？」

「……はい」

神が遣わしたって言われても何の能力もない私には、貴殿方の親切の陰に見え隠れするその期待が負担なんです。きっと言っても分からないだろうけど。

一週間、共に過ごしてよく分かった。彼等にとって、「渡り人」は最も身近な神の力の体現、言わば神への信仰の対象の一片なのだ。しかも、あまりに身近すぎるために彼等自身にその自覚はない。無意識の期待、それは意識しないほどに深く染み付いているともいえる。

だからこそ厄介だと思うし、だからこそ私はそれが恐ろしい。もしも、彼等の期待に応えられなかった時、彼等がどう変わるのか。期待に応えられなかったけならばまだ良い、ただの役立たずと呼ばれるだけだろう、或いは”まだお役目を知らぬだけ”と。

だが、もし、私にも役目と言うものがあり、それがかつて”災厄”と呼ばれたものと同様のものとしたら……神と人の考えは異なる。私がもたらずものが災厄であれば、彼等は私を即座に排除しようとするのではないだろうか。まあ、これはうがち過ぎた考えなのかもしれないが。

どちらにせよ、未来を担保に借りを増やしたくはない。

「王宮と神殿を見ただけでは分かりにくかったことですが、こうして街を歩いてみればよく分かります。今の私は貴族並の扱いを受けているのでしょうか？」

恐らく国一番の豪華な場所と世俗と切り放された場所を見ただけでは、ただ良い生活をさせて貰っている、くらいにしか分からなかった。けれど、こうして市井に降りてみればそれが一般民と比べてどの程度のものであるかは容易に想像できる。二着しか支給されていない衣服にしたところで、デザインこそシンプルだが市井に暮らす人々のそれと比べればその質の差は歴然だ。神殿はそもそも神に仕える人々の施設であって、彼等は基本的に自分の物という物を持たない。その前提で考えるならば、高位神官や貴族が着ても見劣りしないだろう服を二着というのは既に破格の扱いだ。

「私は貴族でも郷土でもなく、普通の一般的な中流家庭の出です。社会構造、基盤そのものが違いますから、こちらの世界の町民やら商人と呼ばれる方々と同じとは言えませんが、少なくとも貴族階級の子女と同じ扱いは私には分不相応です。」

「確かに貴方の生まれはそうかもしれませんが。けれど、今の貴方は”渡り人”であり、そして神は人を生まれの貴賤で差別することはありません。貴方はその生まれを恥じることはありません。貴方はこの世界で成すべき事があると神が認められ、今ここにいますから。」

かもしれないって、何だ。私は一億総中流とかって呼ばれた社会の列記とした庶民だし、そしてそのことを恥じてなんかいない。望んで”渡り人”なんかになったわけでもない。寧ろ、自分で道を選べたと言うのなら絶対に選びはしなかっただろう。

「だからなんだと言うんです？ 世話してやっているんだからおとなしく受け入れるとでも？」

「そうは言っていないません。」

「同じことでしょう？」

その生活そのものが苦痛だと言っているのに。

「誰もが傳かれる生活を願っているわけではありません。」

どうせ、言ったところで分からない。ならば、私に出来るのは一つだけだ。今神殿を出ることが出来ないと言うならば、早々に一人

立ちをし神殿を出ることだ。それまでの余計な出費が減ったと思えば良い。日本にいた頃だって、引越するときには良い条件のところが見付かってからだったのだから。

「もう良いです、分かりました。それでは一人立ち出来るまで、もう暫くお世話になります。」

何を言っても、きっとこの人は理解しようとはしないだろう。

この話はこれで終り、とばかりに何か言いたげにしていた男の言葉をつむがれる前に切り捨て封じた。異論を受け付けるつもりはない。いかに言葉をつむごうと所詮それは加害者側の都合でしかないのだから。被害者側の人間である私が聞かねばならぬ道理はない。

「さて、次は古着屋ですね。案内をお願いします。」

なにはともあれ、まずは仕事をするために必要なものを揃えなくては。ドレスは論外だが、神官服でだってギルドの仕事には向いているとは言えないのだから。

何故ここでの選択肢が古着屋なのかと言うと、この世界、まだ既製服と言うものがほとんど存在しない。新品の服を買おうとすれば、布を買って自分で仕立てるか、仕立て屋に頼むかだけである。となると、裁縫の腕がそれほどない人や、できれば早急に、或いは安く服を手に入れたい場合どうするか、そういった消費者のニーズに对应的なのが古着屋である。サイズとデザインの点で問題がないわけではないが、そもそも作業着として買うのだから今回に限っては問題ない。

こういった知識を私に与えてくれたのは、目の前の残念な美形ではなく、私の生活面での世話をしてくれていた女中さん？の一人である。生きていく上で重要な知識はほとんどその人から教えてもらった。エメラ：姉さん、本当にありがとう。私のほうが年上なのに、

思いつき子ども扱いされた上、お姉ちゃんと呼ぶ事を強要されたけど、それでも貴方には感謝してます。勿論、流石にお姉ちゃんとはいえなくて、姉さんで妥協してもらったわけだけれど……。

因みに、この後の買い物で彼が全く役に立たなかったことをここに明記しておく。そもそも古着屋の場所すら分らないとか……。これだから箱入り育ちの坊っちゃん……。呆れ返った私の声を聞き届けたものはなかった。

エメラさんにお勧めの店の名前を聞いておいて本当に良かった。町の人に尋ねながら漸くたどり着いたのが子供服専門店だったのはやっぱりちよつと凹んだけれど。子供って、成長が早いからお古はこうしてよく売られるらしく、利用者も大人以上に多いんだってね。お陰で良いものが揃いました。

明日から、頑張るぞー！！

安かったし、色々おまけしてもらったのでそれなりの量の子供服と、他にも色々と必要になるだろうと思われる小物類を抱えて日没ちよつと前に神殿に帰りついた。なんか、今日はとっても精神的に疲れる一日だった気がする……。

夕飯もお風呂もそこそこに、今夜もまたさつさと寢床にもぐりこむ。木戸を閉めた窓からは外の様子は分らない。私は明日のことを思い、まぶたを閉じた。

それでは、皆さんお休みなさい。

「それでは行つて来ます。」

いつてらつしゃいやら氣をつけて、頑張つて来いといった多くの言葉に見送られて神殿を出た。何で、こんな事になつたんだろう？ 早めの朝食を食べ、いざ出発と思ったら何故か大勢の神殿職員たちが玄關に集まっていたのだ。神殿の朝は早い。夜明け前の薄明に鳴らされる一の鐘の前に半数の神官は既に起床しており、日の出と共に二の鐘が鳴らされると神殿に住む全ての人が活動を開始する。三の鐘が鳴る頃には食事も終えて、皆仕事を始めているのが常である。

私は今日から初仕事言う事もあり一の鐘で起きて、二の鐘が鳴る前には食事を終えた。それから神官服から作業着に着替えるなど準備を整えて出て来たとは言つても、三の鐘は鳴っていない。まだ仕事を始める時間ではないとは言え、この時間は食事をしたり身嗜みを整えたり、それが終わっていたとしても自分のために使える数少ない貴重な時間である事は変わらない。

なのに、何でこんなに出て来るんだ。多分、神殿に住む人たちの3割以上はいる。……特に神官長、あなたは今日は三の鐘からどっかの貴族だかとの急ぎの面会があるからゆつくり食事も出来やしな何とか昨夜愚痴つてなかったか？ こんなところに来るくらいならゆつくり食事してれば良いのに。

最初は皆で集まって何をしているのかと思つたけれど、それがすぐに私を見送るためのものと気付いて何とも言えない気持ちになった。この世界の神は嫌いだし、出来るものなら殺してしまいたいくらいには憎んでいる。それでも、私のことを特別な目で見てくることに苦手意識は抱いていても、ここの人達のことまで嫌っているわけではないのだ。何より一宿一飯以上の恩がある。私への期待は

正直言って逃げ出したいくらいに重すぎるけれど、彼らが私を心配してくれている気持ちもまた嘘ではないのだ。神への憎しみだけでそれらが無碍にする事もまた、私には出来ない。

そう、たとえそれが、まるで”初めてのお遣い”を見守るかのような生暖かいモノだったとしても……。神官長なんて、ちっちゃい子にするみたいに私の頭撫でていきやがった……。

やっぱりこの人たち、私が成人だってことちゃんと認識してないだろ……！

昨日は神官と辿った道を一人歩く。今日は堅苦しい神官服ではなく昨日買った綿のようなもので出来た丈夫で動きやすい服だ。街の人たちと着ている物はそう変わらない筈だし、浮いて見えることない筈……である。今日は昨日みたいにキラキラしい派手な目印も傍にいない。なのにどうしてこんなに声を掛けられるんだ！？

「マレビトさん」

「今日が初仕事なんだって？」

「頑張れよ」

「頑張つてね、ちっちゃいマレビトさま」

市の客があらかた掃け、店仕舞いをしているおじさんやおばさんたち、市帰りの街の人たち。私はただ、神殿からギルドへ向かう大通りの隅っこを歩いただけだ。なのに皆が皆、私に声を掛けていく。ビックリしてたら、店仕舞いを終えた八百屋のおじさんがこれを食べて仕事を頑張りな、とプラムのようなネクターリンのような果物を

くれた。ありがとう、と言うと美味かったら鼻屑にしてくれ、と去っていった。うん、商売上手なおじさんだ。その後も、次から次へと声を掛けられ昨日は15分ほどで着いた道のりを30分以上掛けて進むことになった。……早めに出て来て良かった。

ギルドに着く頃には微妙に疲労困憊気味に、少なかった筈の手荷物は倍以上になっていた。けれど、漸くギルド到着しこれで終わりかと思われた受難はまだ続くのだった。

まず、第一の難関はギルドの重厚な扉だった。

昨日は神官が開けてくれが今日は一人だ。この扉、巨大な一枚板で作られており、尚且つ鉄によって補強されている。つまり、分厚い・デカイ・重い上に、こちらの人々の成人男性が用いる事を前提とされているために取っ手の位置が丁度私の顔の辺りと高く掴みにくいのだ。かと言って、ドアノッカーもまた高いのでこちらは背伸びをしても届きもしない。とりあえず、扉そのものを叩いてみたが……ただ手が痛いだけだった。

まさかこんな事になるなんて思いもしなかった。

ああ、情けない、意気揚々と出てきながら、職場にたどり着くことすら出来ないなんて。そうやって暫く全体重を掛けて扉を引いてみたり、痛いのを我慢して再び叩いてみたりと奮闘したものの開くわけもなく、これはもう早朝である事を省みずに大声を出すしかないのかと悄然としていたところに堪え切れなくなった様な重低音の笑い声が響いた。

流石の私もこれには思わずキレそうになる。苦勞しているのに気付いたのなら、さっさと開けてくれればいいものを。というか、いつの間に人が来ていたんだ？

ギルドの入り口は大通りからちよつと奥に入った所にあり、人通

りが極端に少なくなる。特に、ギルドに登録している人たちが出てくるのはもつと遅い時間と聞いていたので人がそばにいる事にも全く気付かなかったのだ。誰かいたなら、すぐにでも手伝ってもらったものを。開かない扉に向かって奮闘していた姿を見られていたと言ふ恥かしさもあり、ちよつと、否かなり恨みがましい目でもって振り返った。多分にそれは逆恨みの心持であつたが。

わお。

ふぁんたじー。

そこには爆笑する熊がいた。否、熊に似た何かがいた。多分、所謂ヒト族に属する人間ではない…と思う。

ギルドの入り口は階段になっていて、その上に私は立っているのだが、相手は道路に立っているというのに尚見上げねばならぬ身長、全体的に筋肉質な重圧的な体、毛深…ではなく動物そのものといった感じの黒々とした毛並みに覆われた熊と虎と狼を足したり掛けたり割ったりしたような頭部、手はヒトに似た五本指で、爪は鋭いかどうかやら肉球はないように見える。神殿にはいなかったけれど、この人は恐らく話に聞く獣人という種族なのだろう。彼？は一頻り笑い終えると、啞然として見上げていた私の傍にやってきた。

ホントにデカイ。3m…はないかもしれないが確実に2.5mはあるはずだ。

「お前が新たなマレビトか、笑ってしまったて悪かった。あまりにも可愛らしく見えたのでな。まるで子供の遣いの様だ。」

子供の遣い…やはりそのように見えるのか。なんだか、もうここまで来ると一々気にするのも馬鹿馬鹿しくなってくる。そりゃ、これだけデカイ種族から見れば私なんて子供もいとこだらう。実際、今は若返っているのだから。成長が止まった後も今と5センチも身

長は違わなかった事などこの人たちは知らないのだ。それに、こまでくると最早コンプレックスを抱くとかどうとかと言う次元じゃない気がする。

とりあえず、相手は私のことを知っているようだったからちゃんと挨拶をすることにした。ここにいると言う事はこのヒトもギルドのヒトなのだろうし。

「はじめまして、既にご存知のようですが”渡り人”のアトルディアです。タキと呼んでください。」

タキ、と言うのは予てより考えておいた通り名である。本名である滝根から取った。アトルディアも滝の意味があるし丁度良いだろうと思ったのだ。実際のところは分らないが、意外と私が滝に落とされたのもこの名前の影響もあつたんじやないかななんて思っていたりもする。

因みに、滝と言ってしまふと滝^{ルテ}と勝手に自動翻訳されてしまふのだが、日本語がもつ同音異義、同字多義の特性のお陰なのか、音だけで”たき”と発音する事も可能だったりする。まあ、どちらで呼ばれても私には特に意識していない限りは”たき”と聞こえるのだから問題はない。

「話に聞いたとおりの人間のような。私はエルトダム。見ての通りの獣人だ。普段よくいるのは郊外のギルド支部だがいずれ共に働く事もあるかも知れん。宜しく頼む。」

笑われたときから感じてはいたが、なかなかの良いお声の持ち主のようだ。すぐには思い当たらないが、こういう声の声優さんがいたらきつと売れるだろう。それは兎も角、一体どんな話を聞いたんだ？きつと、街の人も同じ話を聞いたのだろうけど。

「どんな話を聞いたのかは知りませんが……こちらこそ、宜しくお願ひします。エルトダムさん。」

「何、中に入ればすぐに分るさ。さて少し離れる。扉を開けてやる。」

「あ、ありがとうございます?」

中に入れば分るって何さ?

「ああ、そうだ。私のことはドムで良いぞ、タキ。さん付けされるのはむず痒い。」

「…分りました。」

ん?ドム??真っ黒いでつかい熊さんの名前がドム!?しかもさつき日が射したとき気がついたけど、微妙にこの毛並み紫がかつてるよ。まさか三兄弟だったりしないよね……。もしそうだったら、今は何とか堪えてる笑いを堪えきる自信はない、と断言しよう!!私がかくだらない理由で一生懸命笑いを堪えてるなんてつゆ知らず(もしかしたら気付いているのかもしれないが、そんなそぶりは見られなかった)、エルトダムさんは私が全体重を掛けても開けられなかった扉を片手どころか指2本で軽々と開けた。

扉一枚隔てただけのギルドの中は物凄い熱気に包まれていた。昨日の閑散としていた様が嘘のようだ。

人、^{ひと}亜人、^{ひと}獣人、^{ひと}人外、かなり広めだった筈の室内を埋め尽くすようにヒトで溢れかえっている。皆さん私よりはるかに身長が高いものだから、窓口が……見えない。

えーと、これは一体どんな状況なんでしょう？ 何となく、予想はつかなくもないんですが、ちょっと逃げ出したい気分です。

誰かがエルトダムさんの後ろにいる私に気付き、声を上げた。それは次々に連鎖していき、とてつもない大きな歓声に膨れ上がった。歓声にまぎれて「ちゅちえー」とか「かわいいー」とか、中には「見えねー」と嘆く声なども色々と聞こえてくる。

その中に「もえー」「これがごうほろりというものかつ」「かわいいはせいぎ」とかう声も入っていたような気もするが、これは絶対気のせいだろう、そうに違いない、そうであってくれ。いくら過去に日本人がいたからって……まさかね？ニホンが誇る変態因子が異世界まで侵食したなんてことは………全て気のせいだ、空耳に違いない。たまたま、耳慣れた日本語として脳が変な誤変換を引き起こしただけに違いない。単語によっては微妙に自動翻訳ではなかったような気がしたのも気のせいだ……。どれほど気のせいだと言いついても、この熱気のせいだけでなく、その言葉の内容に腰が引けてしまったのだけだ。

私の前に立ちふさがり、壁となっていてくれたエルトダムさんは、思わず後ずさりそうになった私に気がつく、一歩だけ前に足を踏み出した。

そして、深く息を吸い込むと……。

吼えた。

まさにこれぞ鶴の一声。

一瞬にして辺りは静まり返る。エルトダムさんが更に一步踏み込むと、モーゼが海を割ったように一直線に窓口周辺に向けて道が出来た。奥のほうで「ぐえ」だとか「ぎゃあ」「死ぬ」というくぐもった声が聞こえたような気がしたけれど、とりあえず気にしない方が良かったらう。

「仕事のために来たんだらう？」

と、言うエルトダムさんに無言で首を縦に振ると彼に続いて窓口へと向かう。

得体の知れない静寂の中、特に響いている訳でもない私の足音だけがよく聞こえた。窓口に着くと、朝一だということになんだか疲れたような顔のお姉さん（実年齢で言うなら同年代だらうけど、この際もうそれは気にしない）と目が合った。気持ちはとっても良く分るよ、と目線だけで返す。私もなんか今の段階でもう疲れ気味だよ、これから初仕事が待っているというのに。

昨日と同じように背伸びをしてると一瞬の浮遊感の後、お姉さんと目線が合った。うん、斜めに視線が交差するんじゃなくて、目の高さがお姉さんと一緒になったのだ。後方から無声音のどよめきが聞こえた。君たちは騒ぐか黙るかどっちかにしようよね、ビミョーにウザイから。

とりあえず、現状把握、と。

えーと……もしかしくなくても、抱っこされてますよね？ 抱き上げるんじゃないくて、小さい子を椅子に座らせるときみたいに後ろか

ら両腕の下に手を差し込まれて持ち上げられているような感じ……っばい。私の後ろに立っていて、そんなことを軽々で行えそうなヒトは多分、一人しかいなかったはずだ。誰かが瞬間異動でもしてこない限り。

つまり犯人（？）は……お前だ！ 何をしてらっしやるんですか、エルトダムさん？？ 真意を問いただそうと、私も持ち上げている腕の主を見上げてみれば。

「この方が楽だろう？」

ええ、まあそうですね。

色々と削られていつているような気がしますよ、主に精神的な何かが。今度から折りたたみの踏み台でも持つてくることにしようかな、そういうものがこちらにあるかどうかは別として。そんな考えも頭をよぎる。

ええ、既に脳内は現実逃避始めてますけど何か？とりあえず、気にしたところで始まらないので、そのまま窓口のお姉さんと話をする。

お姉さんはちらちらと私の斜め上の方を気にしていたけれど、先程以上の言葉は言わなさそうなエルトダムさんと全然気にしてない私を見て、自分も気にしないことに決めたらしい。さすがにそこは荒くれ者を普段相手にしている窓口業務のお姉さん、切り替えれば仕事は速い。

まず渡されたのはドグダグのようなもの。これが所謂ギルド証になるらしい。チェーン付だったので無くさないように早速首にかける。

このチェーンは呪い付きで、強化されているから滅多に切れることはなく、また引っ張られて装着者の首が絞められるということもないのだそう。地味で目立たないけど実用的で便利な能力付与だ。見ても何も分らないけど。

一見しただけでは何の変哲もないただのチェーンだ。魔法使いは初見で呪いの類を見抜く目を持つと聞いたが、どうやら私にその手の才能はないらしい。若干そのことを残念に思いながら、ついではばかりに、元々ない方だった上に今では完全にぺったんこになってしまった胸で揺れているギルド証に目をやる。ギルド証自体はまさに形がドグタグそのもので、例の切り欠きもあつたりする。やっぱりこれって、用途はアレだよね？ 気になるけど聞かないでおこう。なんか最近私、そんなのばかりだな……。このいい加減さが異世界で生きていくための条件の一つなのかもしれない。

そんなこんなで然程時間もかからず、昨日聞いた説明を軽くお返しし、依頼主のお宅の場所と行き方、約束の時間などを再確認すると窓口での手続きは終了した。すると静かに床に足が着く。それなりにすぐ済んだとは言え、ちよつとした時間子供一人を抱えていたとは思えないくらい全く疲れが見えないエルトダムさん。本当、この世界のひと私では基礎的の身体能力がまるで違うようだ。神様もなんで私なんかをこの世界に連れてこようと思ったのか。

まあ、それは兎も角御礼をしなくては。彼がいなければ、窓口に辿りつくことすらきつと出来なかっただろうから。

「ドムさん、ありがとうございます。」

一礼して見上げるとドムさんは苦笑いをしていた。

「気にするな、私も後ろの連中とそう変わりはない。」

どつという意味だろうか、と思い最初に彼が言っていた言葉を思い出す。「通常使うギルドは郊外だ」と確か彼は言っていた。つまり、彼もまた私見学^{ミシナ}を目的とした野次馬の一人であつたと言う事か。それがたまたまギルドに来てみたら、その見物対象がドアの前で四苦

八苦していたと……。

でも、まあ。

「助けてくれた事には変わりありませんから。それと、もし良ければこれ食べてください。ここに来るまでに街の人たちから貰ったんですけど、私一人では食べきれないので。お礼として受け取ってもらえれば嬉しいです。」

神殿を出たときに比べて倍近くに膨らんでしまったバッグから大きめの果物を一つ手渡す。エルトダムさんは苦笑いしつつも受け取ってくれた。自分も野次馬目的で着たことにちよつと気まずさがあったらしい。そして更にいくつかの果物を取り出して窓口の台にも置く。

「皆さんもどうぞ。どうやら私のせいでご迷惑をおかけしてしまつたようですから。」

私が主導したわけではないが、どう考えてもこの事態は私が原因だろうし、これは完全な営業妨害だろう。ならばせめて少しでもお詫びをせねばなるまいと思つたのだが。

「あら、気にしないでいいのに。彼らが早い時間に大勢で来てついでとばかりに依頼を受けていったから今日の午前中の仕事はもうないのよ。」

と、お姉さん。

後ろから「仕事とらなきゃここに居座るなつて言つたのは誰だよ」とか言う声が聞こえてくる。

なるほど、ではいつもなら七の鐘がなる頃（凡そ正午）までに終わるかどうか、と言う仕事在三の鐘が過ぎた時点で済んでしまつた

と言う事か。それならそんなに気にする事もなかったかな、とも思うけれど、逆に考えれば通常三時間以上かけて行われる仕事が一時間足らずで終わってしまった、しかも全ての依頼が無くなったと言う事はいつも以上のスピードでいつも以上の分量を捌くべく窓口は稼働していたと言う事になる。

そりゃ、最初にあつたときに疲れた顔をしていたのも道理である。

「やっぱり、私にも一因があるようなので是非受け取ってください。」

「

「そう？ではありがたくいただく事にするわ。」

更に美容に良いと言われ手渡された小さな果物も一つ一緒に渡す。それが見えたのかお姉さんはちよつと嬉しそうだった。是非それを食べて疲れを癒してください。

さて、後は仕事先に向かうだけなのだが……。さつきから相変わらずこちらを見つめてくる大量の視線……。これを一体どうしよう？

考えてみたところで始まらない、と言う事で。とりあえず、まずは様子見。エルトダムさんの後ろからこっそりと覗き込む。

……なんか、物凄いい数の視線が。振り向くまでもなく感じていたそれらを直接見るのは、ちょっとどころでなく怖い。知らず、エルトダムさんの外套を握り締めていた手に力が入る。

すると、ぽんと軽く頭に何かが載った。

聞こえてきた「お前ばかりずるい」という声に、それがエルトダムさんの手であることに気付く。ああ、やっぱり肉球はないんだなあ、と思いのほか毛の薄いその掌を眺めていたら、何となく恐怖が薄れた。ふと、彼の言葉を思い出す。そういえばこの人も私を見に来たんだと言っていたつけ。

つまり、ここにいるのは皆エルトダムさんと同じような人。エルトダムさんは恐くない。なら、きっとこの人たちも怖くない筈だ。最初に見た姿が爆笑している姿だったからか、何故かエルトダムさんは恐くなかった。身長なんて私の倍以上あるし、外見からすればこの中にいる誰よりも恐そうなんだけどね。

だから、勇気を出して一歩踏み出す。この人たちは今日から私の仕事仲間になる人たち。怖いことなんて何も無い。これは新入社員が先輩方にする挨拶と同じようなもの。結局地球では出来ないままだったけれど。昨日だって、短かったけどちゃんと挨拶できたんだから。

昨日のは多分に、ちょっと驚かしてやれ、という気持ちが多かった訳だけれど。それでも、昨日できた事は今日も出来るはず、状況はちよつと……否、人数も状況も大分違うけど、やるべき事は一緒だろう。

まずは一礼。

さあ、行こう！

「はじめまして。挨拶が遅くなり申し訳ありません。昨日、本ギルドの一員になりました”渡り人”アトルディアです。」

言葉を挟む隙を与えず一気に続ける。

「名前からも分るように、先日このエグザードナの街の北西に位置する滝、アトルディアに落とされました。出身は地球の日本です。読み書き計算は得意ですが、いまだ特殊能力は分っていません。ここに来てまだ日も浅く、私に出来る仕事も少ないと思いますし、まだまだ未熟者です。皆様にご迷惑をおかけする事もあると思います。どうぞ宜しくお願いいたします。」

ちゃんと、皆最後まで静かに聞いてくれた。

顔をあげるとただの好奇心の塊と言った表情だったのが、だいぶ穏やかな感じになっていた。その上、皆、何故かうれしそうに笑っている。私が不思議そうに彼らを見渡していると、誰からともなく発せられた言葉が重なりあい、一つの言葉を紡ぎだした。

「ようこそアトルディア、俺達のギルドに。」

笑顔とともに発せられた言葉に、何かが解けていくような気がした。似たような事は神殿でも言われていた筈なのに、どうしてか今心が温かった。

ああ、私の考えは間違っていなかったんだ。彼らは、ただ私のことを知りたいだけだったのだ。決して、私を傷付けるために押しかけたのではなく、私を迎え入れるために皆集まってくれたのだ。そう気付いたら、作り笑いではなく、思わず自分の表情も緩んだのが

わかった。

いきなり神様によって誘拐されて、訳の分らない状況に晒されて、多分、今まで私はこの世界の人たちを素直に見ることが出来ずにいたんだろう。ここに来るまでの道のりでも困惑しか私にはなかった。この1週間はほとんど神殿からも出してもらえず、言葉で説明はされて知識としては分った気になっていたけれど、全く自分の状況がどうなっているのか実感が持てないままだった。神殿の人々は当然ながら神様よりの人だから尚の事。

今なら、少しは素直に彼らとも接する事が出来るかもしれない、とそう思った。尤も、私の後見になったあの青年とはやっぱりウマが合いそうにないけど。アレは………なんと言うか、その、暑苦しい……。

その後は質疑応答。自己紹介は、いずれ個別にという事になった。どこに住んでいるのか、といったことや、地球では何時代にいたのかなど、中には日本に住んでいたのなら聖地に行ったことはあるか、という質問まで。日本の聖地ってどこだ…？

驚かれたのは年齢。若返った事も、成人したともいつていたが、こちらと日本で成人年齢のが違う事をすっかり忘れていたためだ。彼らはどうも私が成人と入っても、成人したての12歳だと思っていたようだ。……10歳もサバを読むつもりはないのだけれど。

まあ、そんな風に一応和やかに時間は過ぎてゆき、そろそろ依頼先に向かわねば、と言うときになって問題が起きた。多くのギルド員が私を送っていくといって聞かなかったからだ。それを解決したのはエルトダムさんと窓口のお姐さんだった。

「どうやら今日はここにはもう仕事がないようだしな。ついでだ、私が送っていこう。」

困り果てた私に提案をしたのはエルトダムさん。

すかさず、

「お前ばかりずるい」

「ロリコンめ」

「俺だって話したいのに」

などという抗議が起きるも、エルトダムさんが吼えるまでもなく、それらは窓口のお姉さんの一言で沈静化した。

「あんた達はさっさと仕事に向かいな！」

ドスの聞いた、お腹に響く声でした。

……そうだよ。ギルドなんて荒くれ者たちが自然と多くなるような職場の窓口業務を勤めるお姉さんが、唯の綺麗なものだけの人なわけがなかった。今度から、心の中では姐さんと呼ばせてもらおう。

「ドムさん、今日はどうもありがとうございます。とても助かりました。」

あれからエルトダムさんに送られて、依頼主の家の前に到着した。市は終わったし、街のお店が開くにはもう暫くあるからか、それとも歩いたのが大通りではなかったからか、朝とは打って変わって街の中は人通りが少なかった。それでも、少ない人々が私達の方を眺めてくるだけで誰も話しかけてこなかったのは、きっとエルトダムさんのお陰に違いない。

「いや、こちらとしても噂の”マレビット様”と話せて、良い話の種類が出来た。きっと皆手薬煉引いて待っている事だろう。」

そういえば、忘れがちだけどこの人も野次馬に来たんだった皆、ってことは郊外のギルドの人たちの代表だったのかな？

「あははは……あんまり、変な噂は広げないでくださいね？」

「善処しよう。見聞きしたことだけを話すことは誓えるが、その後どう尾鰭がつくかまでは分らないからな。」

「それで構いません、宜しくお願いします。」

約束の時間である四の鐘はまだ鳴っていない。

でも恐らくもうすぐの筈だ。今朝初めて会ったばかりのヒトだというのに、このまま別れるってしまうのはとても名残惜しい気がした。けれどそれもここでおしまい。私はこれから仕事で、エルトダムさんも馴染みのギルド支部へ行けば仕事があるのだろう。

だから、今日はお別れ。でも、同じ街に住んでいるのだから、きつとまた会う日が来るに違いない。だからにっこりと笑って伝える。

「また、お会いしましょう。エルトダムさん。」

「そうだな、また合おう。タキィアトルディア。」

まだ、この人にしか名乗っていない名で読んでくれる。きつと、その意味には気付いていないだろうけど。

「ええ。それじゃあ、また。」

「ではな。」

静かにエルトダムさんが去っていく。一緒に歩いていたときも思っただけ、本当に静かに歩く人だ。

エルトダムさん。

彼は知らないだろうけど、こちらの世界に来て初めて私から名乗った人。そして、多分神殿の人以外で、最も一緒にいた時間が長い人。貴方はどう思っているか知りませんが、私の中で貴方はこの世界での一番最初の友達に決定しました。

また会う日までどうか、お元気で。そのときを楽しみにしています。

再びにぎやかになり始めた街の雑踏に消えていくエルトダムさんの姿が完全に見えなくなった頃、四の鐘が鳴り響いた。

さて、お仕事に行きますか！

依頼主の家はこの街のどこにでもありそうな普通の家だった。ギルドや神殿と違って木造2階建の一軒家だ。門扉や前庭などのようなものはなく、道に直接玄関が接している。この家のノッカーには手が届くことはエルトダムさんと一緒にいたときに確認済みだ。爪先立ちで背伸びをしながら戸を叩く。

……返事がない。

もう一度叩く。今度は少し強めに。

しかし、返事はない。

あれ、場所を間違えたか？エルトダムさんにも確認してもらったのだからそんなことはないと思うのだが。念のため、と思い表札の番地と名前を確認する。

二の左街二の北小路三の西小路四
ハルディア

間違いない。この街は碁盤目上に形成されており、町の真ん中にある神殿を中心にその西側を左街、東側を右街と呼ぶ。更に南北で三つの区画に分かれ、北側を一の街、真ん中を二の街、南側を三の街と呼ばれる。後は家がある区画に面した道路によって指定される。道路の名前は町を中心に十字に貫く、南北の神宮大路、東西の神殿大路の2本を中心に、神宮大路の南北、神殿大路の東西にそれぞれ一から六の小路が平行している。依頼主のハルディアさんの家は西側の二の街、神殿大路から二本目、神宮大路から三本目の小路に

面した区画の4番目の家、という事になる。

因みに、この住所表記、区画を表すとおりの名前が座標になっているので、実は。街という部分は書かなくても十分通じたりする。それでも書くのは、その方がイメージ的に分りやすいのと、もはや慣習となつてしまっているかららしい。

まあ、こんな感じに分りやすい住所表記となつていたので郵便事情はとても良かったりする。車もないというのに国内なら1週間以内に届くというのだから凄い話だ。

閑話休題。

大体同じ区画内で同じ仮名を付ける人というのはないから、例えばギルドから貰った住所が間違つていたとしてもハルディアの名を表札に掲げる家が近所にあるとも思えないので確かにここであつて
いるんだろう。

さて、どうしたものか。とりあえずもう一度叩いて、声を出して呼んでみよう。それほど大きくもない木造家屋なのだから、きっと呼べば聞こえる筈だ。それでいなければ隣近所に聞くのも有りだろう。そもそもこの世界、日本のように時間に厳肅というわけではないのだから。

それでは深呼吸して、

「おはよう」――

「あらあら、もういらしてたの？」

――「ザイマス…、えっと、ハルディアさん？」

大きな声で呼ぼうとした所で、後ろから朗らかな声がかかった。尻すばみになった朝の挨拶の後、念のために誰何しつつ振り返った。そこにはどこかのんびりとした雰囲気、買い物袋を抱えたおば

あさんが一人立っていた。何か、今日はこんなんばかりか、私。

「ハルディアさん、これは？」

「ああ、それは抜かずにそのままにしておいて。それと、その隣のは移植したいから、根の周りの土ごと深めに取って頂戴。」

「はい。」

現在絶賛庭弄り中です。

庭のベンチに座るハルディアさんの指示に従いつつ、雑草は抜き、必要なら花の移植などをしています。土いじりにはリラックス効果があると以前何かで読んだことがあったけれど、確かにこれは楽しい。まだ然程強くない日差しは暑すぎることはなく、時折吹き抜ける風が涼しく、心地良かった。

本当に気持ちがいい。仕事で来てるのでなければ、このまま草の上で寝てしまいたいくらいだ。よくよく考えれば、このところ緊張のし通しで心が休まる時なんて全くなかったのだ。ずっと鬱屈とした思いを抱えていた事を考えると、なんだか自分でもおかしいなと思うくらい今の気持ちはすっきりしているが、もしかしたらこれも神とやらがいじった結果なのかもしれない。その事に苛立ちを覚えてもいいはずだったが、一度消えた暗い感情は早々に復帰する事もなく、どうせなるようにしかならないのだから仕方がない、と割り切った。色々と考えながらも手は動かし、それに合わせるようにハルディアさんは次々と指示を出していった。

「あ、その花はその場所のままでいいから、花を全部摘んで頂戴。摘めばすぐにまた新しい芽が出てくるのよ。摘んだ花は美味しいお

茶になるから、後で淹れて上げるわね。」

「楽しみにしてます。」

赤いコスモスのような色をした、うつすらと透き通る薄い花びらの花を摘んでいく。枯れかけの花は抜いた雑草と一緒にし、新鮮な花だけを選び集める。まるでイチゴか桃のような甘い香りのする花だ。ハルディアさんに言われて生のまま一つ食べてみたら、香りに反して酸味の強い花だった。仄かに甘みも感じるが、香りで期待していた分、肩透かしを食ったような感じだ。でも、これのお茶なら味は期待できそうだ。

野外での仕事なので途中途中に水分補給挟みながら作業を続けること3時間ばかり。こちらの時間で言うなら二刻あまり、七の鐘が鳴り昼の休憩を取る事になった。食事のお供は早速ハルディアさんが淹れてくれたルータの花茶だ。

「あら、それじゃあ、貴方が噂のマレビトさんだったのね。こんな仕事頼んじやって悪かったかしら。」

「いえいえ、私は何の力もありませんし、この体ですから荒事には向いていません。寧ろこういった仕事があつて有り難いくらいです。」

「そう？ それなら良かったわ。」

「ええ、なので今後とも宜しくお願いします。」

ハルディアさんの依頼、それは年をとってあまり体が聞かなくなつたから、荒れ始めていた家の庭をきれいにしたい、というも

のだった。ギルドの方にはそういった事情は一切書かれておらず、内容も草むしりだけ書かれていたけれど。ハルディアさんは息子さんがひとり立ちしてからはずっと長い事一人暮らしをしているそう。それでも今までは何とかやってこれたけれど、昨年足を怪我してからは無理もきかず、それでギルドに頼みに来たらしい。

ギルドではこういった街の人のちよつとした困りごとを受け付けている。内容の微妙な食い違いは時折起きるそう、街中で命に関わる事はまずない仕事だと特にその傾向が強いとか。荒事になれたギルド員からしてみれば、草むしりも庭整理もそう違いはないのかもしれない。

とは言っても、今日ギルドであつたような屈強な大人たちは、普段はより報酬が高く、その分危険度も高い依頼を中心にこなしているわけで、こういった街の困りごとを主に処理する人々はまた別の層なのだという。大概それは、社会経験の一環、或いは小遣い稼ぎとしてバイト感覚でこなす成人したての少年であることが多いとのこと。私もある意味ではその一人と言える。他には、暇を持て余した主婦などがちよつとしたへソクリ目当てでやる事もあるらしい。

ハルディアさんが朝いかなかったのは、てっきり今回もそういう子供が来るのだと思ってお菓子を買いに行っていたんだとか。確かにその年頃の男子はよく食べるしなあ、と思いながら聞いていたら、帰ってきたら随分と幼い子供がいてビックリしたと言われ、再び何とも言い難い思いを味わった。体が子供になつてしまったことをしっかりと認識していても、やはり子供と言われる事には未だ抵抗があった。

そうそう、ハルディアさんは私がマレビトだといさつきまで気付いていなかったらしい。一応最初に自己紹介はしたのだが、「渡り人」とは名乗らなかつたので、随分ちっちゃい子が来たな、位にしか思っていなかつたのだそう。朝市に出会った人々はすぐに私にマレビトと声を掛けてきたので、もしかしたら街中に認知されているんじゃないかと思うていたのだが、どうやらそれは

少しばかり自意識過剰だったようだ。

神殿が用意してくれたお弁当と、今朝貰った果物を食べて、昼食は終わり。果物はハルディアさんと半分にした。仕事に来てもらっているのに、と遠慮気味だったが、それでもまだバッグの中に沢山残っているそれを見て、そういうことなら、と美味しそうに食べていた。やっぱり食事は誰かと一緒にのほうがいいと思う。八の鐘が鳴ったら作業再開ということで、暫しのんびりとお茶を飲みながらおしゃべりを楽しんだ。

かつては街で教師をしていた事もあったと言うハルディアさんの話は、分りやすくそして興味深いものばかりだった。私の名前にもなった精霊アトルディアの由来や、精霊や神の加護の効能など、その話は尽きなかった。

午後の仕事はひとまず雑草抜き。午前中に教えてもらった抜いても良い草をただ只管に抜いていく。中には雑草だけれど薬効があると言う蓬やハーブのようなものもあって、それは別なところを選び分けておいた。それにしてもこここの植物たちは繁殖力旺盛だな、と思いつながら作業を続けているとハルディアさんが苦笑いした。

「本当なら悪い事ではないのだけれど、植物が良く育ちすぎちゃうのよね。私も水霊の加護を受けているから。」

これがお昼に教えてもらった精霊の加護の効能の表れなのだろう。水霊の加護を持つ者は何かを育てるのに向いているそうだ。どうやら、それは同じく水霊のかごを持つらしい私にも言えることらしく、よくよく見てみれば午前中に抜いた雑草が萎れることもなくまだ青々としていた。このまま放置したら、もしかしたら明日の朝には根付いたりしてるんじゃないだろうかと言う考えが頭を過ぎっ

たが、まあ、それは考えすぎと言うものだろう。

やがて太陽が傾き、いくつかの月が昇り始めた頃、一先ず今日の作業は終わりと言う事になった。ハルディアさんの家の庭はとても広い。何でも、このあたりの家の二軒分の土地に家と庭を造っているとの事で、庭の広さは普通の家のほぼ1・5倍だ。その広い庭に様々な植物が生い茂り、ちよつとした混沌^{カオス}状態になっている。

今日、手を入れたところはきれいになったが、まだ八割方が荒れたままだ。一応、以前は花壇や畑だったんだろうなという区分けは何となく分るようになったものの、まだまだ色々な種類が入り混じり、この整理に一体何日かかるのか、と言った感じだ。まあ、期限付きの依頼じゃないから数日かかって問題はない、報酬額は決まっているから結果的に時給換算すると安くなってしまうというだけのことだ。この分だと、今週いっぱい掛かるかもしれないと予測しつつ、ハルディアさんの話も面白いし、それもありかなと思いいながら家路を辿った。

途中ギルドに立ち寄り経過報告——するもしないもギルド員の自由だが、報・連・相は重要だ、どんな仕事であれ、有ると無しとでは印象ががらりと変わる——を済ませ、神殿へと戻る。久々の肉体労働で疲れた体は、何よりも休息を望んでいた。

仕事を始める事にした当初の目論見どおり、というかそんなことも何も思い浮かばないままに私の意識は闇に融けた。

こうして、私の異世界における社会人生活の第一日は幕を下ろしたのである。

初仕事開始から五日目。今日もギルドへ寄ってからハルディアさんの家へと向かう。初日のちよつとした騒動を知った神官がギルド本部までついて来るといふ過保護振りを示すのも、ハルディアさんの家までギルドの誰かが送ってくれるのも恒例となりつつある。尤も、街の人も慣れたようで、神官が憑いて（変換ミスではない）いようと屈強なギルド員が傍にいようと全く臆することなく私に話しかけてくるようになった。

まあ、いくらギルド員が厳ついとは言っても街の人たちは直接的であれ間接的であれ彼らに助けられているということもあり、一瞬の躊躇はあれど、慣れればそれは障害足りえなくなった。それでも彼らがいれば、街の人たちに囲まれて立ち往生するようなことにはならず済むので、初日と比べると効果は薄まったとは言え、私にとっては十分な助けになっていた。

彼らとしても、この時間を私とかわりを持つ貴重な時間と捉えているようだ。

今までに現れたマレビトには後にギルドで活躍した人も多かったと聞くから、今のうちに睡付けとこうみたいな青田買いの心境なのかもしれない。初日にあれだけ集まっていたのも、そういう意味合いが強かったのだろうと思う。

このお朝の送迎（？）の独占は禁止だとかで、今後の当番も決まっているらしい。つまり、ハルディアさんのところでの仕事が終わっても、暫くの間は私がギルドの仕事を請けるたびに誰かしらがついて来るといふことになるらしい。私としても彼らとの交流は、神殿以外のヒトの目から見たこの世界を知る良い機会なので悪い事ではないと思っている。神殿から当分の間は離れられない身にすれば、ギルド員と仕事の依頼主だけが交流の持てる一般人であるといえる。

果たしてギルド員を一般人と言つて良いかは分らないが、少なくとも神官や貴族と比べれば神から縁遠い人々だろう。朝の僅かな時間では大概は彼らの自己紹介に終始してしまうとは言え、意外にお喋りな彼らが聞かせてくれる街の話が面白いのも悪くないと思う理由の一つだ。

たった4日の間でも、ハルディアさんがかつて教職に就いていたとか、その頃は怒らせると怖い鬼教師だったとか——実感がたつぷり籠っていたのは、恐らくそれを教えてくれた彼自身が当時ハルディアさんに絞られた一人だったからなのだろう——、私の後見でもあるあの神官はこの街に来てまだ間もないと言うのに街の女性陣から既に観賞用として認識されているらしいと言う話、エルトダムさんはこの街だけでなく、隣国にまで名の知られた戦士であるとか、どこで聞いてくるのか。の商店——^{かつら}プライバシーに関わるので伏字にさせて貰う——の店主は実は鬘^{かつら}なのだとか、街のどこかに精霊のたむろする場所があるらしいとか、その内容は多岐に渡る。中には買物毎月何日が安くてお勧めだとか、何処の店の料理が安くて美味いとか、街のお役立ち情報まであつたくらいだ。彼らの話をまとめればあつという間にタウン情報誌の1冊でも出来上がりそうだ。情報の内容は玉石混交、たまにガセ入り、だとしても。

そんな話を聞きながら、時折質問を交えつつ、街の人にも挨拶をしながら今日もハルディアさんの家に無事に着いた。これから街の外へと仕事に行くのだと言うギルド員を見送り、急いで庭へと向かった。

庭に着くと、ハルディアさんは既に外に出ていた。荒れ放題だった庭も今はもう庭兼畑と辛うじて呼べる程度にまでは回復している。雑草がなくなるだけでこんなにも雰囲気は変わるものかと、昨日までの筋肉痛に苦しめられた日々を思う。ただ只管雑草を抜き、刈り、

使えるものを選別していく、大変だったけれどその甲斐はあったなと感ずる。

雑草と呼ばれる中にも薬効がする者が混ざっていると教えられたのは一日目。選り分けておいたそれらは、ハルディアさんの手によって軒下いっばいに吊るされていた。その薬草が作り出す木陰を抜けながらに葉の奥へと向かった。

「おはようございます、ハルさん」

いつものように庭の奥にある日当たりの良いお気に入りのベンチに腰掛けていたハルディアさんに声を掛けた。

ハルディアさんのことをハルさんと呼ぶようになったのは二日目以降の事だ。天候か季節の話をしていたときだったか、日本でも主に春を意味するハルと言う名前は昔からあるポピュラーな名だと教えたなら、是非そう呼んで欲しいと楽しげに言われたからだ。

「おはよう、タキ。今日はちょっと早いよね。」

まだ四の鐘が鳴る前に来た私にハルディアさんは微笑む。

ハルディアさんをハルさんと呼ぶようになったとき、私もタキと呼んでくれるように頼んだ。彼女との付き合いを今回限りで終わらせてしまうにはあまりに勿体無いと思ったからだ。まだ聞いていないのだが、この仕事が終わってもたまに遊びに来て良いか尋ねてみるつもりだ。

かつて教師だったからなのか、それともただ単にそういう性格なのか、彼女は惜しむことなく多くの知識を私に与えてくれる。それは作業中のことだったり、休憩中のことだったり。一つの分野に囚われない広い知識は大いに私の好奇心を刺激した。もしかしたら既に、神殿で学んだ内容以上のことをハルディアさんから教わったかもしれない。ハルディアさんはどう思っているか分らないけれど、

できればこれから付き合いを続けていければ良いな、と思う。

暖かな朝の日差しを浴びながら、今日の作業の予定について雑談を交えつつ話をする。一応の流れが決まった頃、四の鐘の音が響いた。

「それじゃあ、早速始めましょうか。」

「はい！」

水霊の加護がある者はそうでない者より生物をより上手に育てられると聞いたのは初日の事。他の精霊の事なら兎も角、私自身水霊の加護を持つらしいのに、何で教えてくれなかったのだろうと思っていたのだが、実は、後になって聞いてみたところ最初の一週間の時に神官がその事も教えてくれていたらしい。あの一週間は精神状態が不安定だった自覚が今ではあるので、聞き逃すか覚えられなかったのだろう。

改めて聞きなおすついでにと精霊の加護について詳しい説明を求めたら、教えてくれた。色々細かい蒔蓄まで話し始めそうだったので、とりあえず気になっていた土や光の精霊の加護では植物は上手に育てられないのかという点だけ聞いてみた。植物の性質を知っていれば、植物の成長に水が大きく関わっているのは理解できる。それなら、土や光の精霊の加護を持つ者も同じような特性があるのだろうか、と考えるのは当然の事だと思う。

結果として、やはり私の想像は間違っていなかった。

水に限らず全ての精霊、火や風、闇の精霊の加護でもうまく使えば生育は促進されるとの事。ただ、それなりに条件もあるから大抵の場所で有効視されるのが水の精霊の加護なのだと言っていた。例えるなら、極寒の地でなら火霊の加護はより有効に作用するだろう

が、砂漠では悪化させるだけ、という事だ。逆に言えば、水霊の加護だって氷点下の極寒の地や文字通り焼け石に水的な火山ではるくに効果は出ない。それでも、精霊の中で水は天も地も廻るという特性から、特に汎用性が高く応用が利きやすいのだそう。まあ、とにかく精霊の加護の効能というのは使い方次第、なのだと言っていた。

そして今日、ハルディアさんに教えてもらったのは、まさにそれの实践版とでも言うべきものだった。他の精霊の加護でもやり方次第で植物の栽培に貢献できるということは、水霊の加護も工夫すれば更なる効果を発揮すると言える。ハルディアさんが教えてくれたのはその手法だった。

水霊の加護を最大限に活かす植え方、というものがあるのだそうだ。苗を植えるにしても種を植えるにしても、少し気をつけるだけで収穫が格段に変わるらしい。

ハルディアさんの実演を見、細かな指導を受けながらその動きをなぞるように植えていく。精霊の姿を直に見れるのなら楽に出来る様になるらしいが、残念ながら私は精霊が見れない。だから、上手くいったのかも私には分らなかったのだが、どうやら移植作業自体も水霊の加護の増幅（？）も無事に終わったらしい。日本にいた頃には全く庭弄りなんてしたことなかった私には、比較対象がないのでどの程度の違いがあるのか全く分からなかったけれど。

「いずれ精霊の姿を見られるようになったらきつと分るわ。」

ハルディアさんはそう言って笑う。いまだ精霊の存在を確信できていない私に、本当にそんな日が来るのだろうか、と思わずこぼせば、心配は要らないといわれた。

「あなたは、あの”アトルディア”の加護をもつのだから」

と。

それはどういう意味かと再度聞いてみても、いずれ分るから、と答えを貰う事はなかった。この時、こうしてはぐらかされた事が、逆に私が精霊に関心を抱くことになる一因だったのかもしれないと、後になって私は思った。

ハルディアさんと過ごす数日間はとても楽しいものだったけれど、どんなものにも終わりは来る。

仕事を始めて六日目。丁度一週間たったその日で、ハルディアさんからの依頼は終了した。

見違えるようにきれいになった庭でハルディアさんは満足そうに笑っていた。だから、ちょっと図々しいかなとは思ったけれど、今度は仕事としてではなく、遊びに来て構わないだろうかと聞いてみた。

「こんなおばあちゃんのところの良いのなら、是非遊びに来て頂戴。いつでも歓迎するわ。」

ハルディアさんは嬉しそうにそう言ってくれた。帰り際、ハルディアさんはこれも持っていきなさい、あれもあったわ、と作業中に刈り取って干しておいた薬草数種やハーブティー、その他色々なものを持たせてくれた。別れの言葉は「さようなら」ではなく、「また来て頂戴」。

「必ず、また来ます。」

そう応えて、ハルディアさんの家を後にした。

ギルドへ戻り報告をして依頼は完了、受け取った報酬は一分銀4枚。

これは大体2〜3日分の生活費に相当する。宿に泊まろうと思ったら、丁度1食付で二泊分だ。6日働いて2日の生活費……。衣食住を兼ね備えた神殿での住み込みでなければこの給料では、とてもやっていけそうもないなあ、と改めて目標の遠さを再認識する。

それでも、初めてこの世界で自分で働いて得た報酬はとても嬉しいものだった。

異世界へ落とされて二週間と一日が経過した。

二週間といっても、これはこちらでの数え方なので、地球の数え方ではまだ十三日間だ。まだ半月も経っていない。でも、その割には大分慣れたかな、と思う。いつ帰れるのか、そもそも帰ることが可能なのかすら分らない。寧ろ、自分の類型で行くと帰れない可能性が限りなく高いらしいと言う事だけは分った。

身体まで作り変えられてしまった「渡り人」が、元の世界へと帰った前例はないという。だからと言って諦めるつもりは全くない。諦めが肝心とも言っけれど、どこぞの籠球部の顧問じゃないが諦めたらそこでお終いだ。

だから私は諦めない。なんだか意地になっっているようにも聞こえるけれど、前例がないからありえないなんて事は、それこそありえない。常に先へ先へと歩み続けるのが人間というものだ。そうでなければ、恐竜の影に怯えながら生きてきたネズミが科学を発展させて月にまで行ったりしないだろう。他の世界のヒトは知らないけれど、地球のホモ・サピエンス・サピエンスなんてナルっぱい学名を自分たちに付けてしまった種族は欲望に向かって邁進する生き物だ。いくら体を弄られたからって、私がその人間の一人として生を受けたことに間違いないのだから。

まあ、これは今考えてもあまり意味のないことなのだけけれど。

神殿の外に出るようになって一週間、これをもうと言うかまだと言うかは人によるだろう。ギルドの仕事をして満たし、知り合いも増えた。そこで分ったのは、私が何も知らないということ。この世界のことを、私は何も知らない。

私に分っているのは、神が実在する世界だと言う事だけ。

「渡り人」が1週間という本当に短い期間で安全な庇護下から放り出させれるのはこのためだったのか、と今更ながら気が付いた。頭で認識するだけでなく、しっかり心でも認識しなければ、人は前に進めないのだ。

今なら”まだ”全部始まったばかりだ。

私は、変わることが出来る。

果たしてこれが、ヒト種に限るものなのか、それとも他の「渡り人」にとってもそうなのかは分からないけれど、少なくとも私にとつてはこの期間は最適だったと言えるのだろう。

一月もたてば、甘えてしまう以外何も出来なくなってしまう自覚はあった。でも、多分それだけではすまなかったはずだ。私は、きっと、この世界を見ることも拒否したに違いない。自分が変わることを、拒否してしまっただろう。

それは多分、生きる事を拒否する事でもあったはずだ。

私は、今からこの世界で生きていく。いつか地球に帰るためにも。私は、生きなきゃいけないんだ。生きると言うのは、ただ命を繋ぐ事だけを意味しているのではない、とよく地球にいる頃耳にした。本当に、そのとおりだと思う。

この世界での成人は12歳なのだという。それは一人立ちの年を顕しているのではなく、自ら責任のある選択が出来るようになる年なのだという。

私も、そう在ろう、そう在れる様努力しよう。

自らの目で見、耳で聞き、多くのヒトと関わり合って、色んなものを受け入れて、それらを消化して、自分の意思で選択して行く。それが多分生きると言う事であり、私が目指していた自立する

と言っ事なのだと思っから。

ハルディアさんの依頼から2週間、私は非常に大きな問題に直面していた。

仕事は至って順調である。この2週間、いくつかの似たような家事手伝いの依頼をこなす日々が続いた。草むしりはちよつと体力的にきつかったから室内作業の掃除洗濯とか、或いは半日の子守を3日間とか。どの仕事でも自分の体力の無さを痛感させられてばかりではあったが、依頼主の期待には十分に応えることが出来たと思う。ま、依頼内容以上にマレビトの加護なるものを期待されていたような気もするけれど、それはそれで仕方が無い事なのだろう。地球でだって、もしも目に見える形で神の奇跡の体現があったとすれば、そのご利益にあやかろうという人はいるだろうから。

ギルドの人たちによる依頼先までの付き添いは今も続いている。そのお陰もあってか、主に本部で仕事を斡旋して貰っている人たちとは顔馴染みになった。何故か、声をかけてくるのは皆「まさに冒険者」と言ったような感じの、難易度の高い依頼を専門にこなしている人ばかりだったりするので、仕事はほとんど被らない訳だが。

仕事が被っている、この辺りに住んでいる年若いギルド員とはほとんど顔を会わせる事が無かったりする。時々、出会うことがあってもすぐに逃げられてしまう。理由が分らないので困惑するばかりだ。現状では静観を貫いているが、その内こちらから働きかけをしたほうが良いのだろうか。

因みに、私が初仕事をした日に一気に消えた依頼書だが、ハルディアさんの依頼を終える頃にはほぼ同じ量まで、否、寧ろそれ以上に増えていた。しかも、全て街中の、家事手伝いを中心とした単純な仕事ばかりだ。マレビトが仕事に来るかもしれない、と依頼に来る人が殺到したらしい。尤も、本当に人手を要するものの以外の依頼

は断られたとのことだが。エグザードナ地区におけるギルド本部の本来の役割は地区内の統括と各支部では対応しかねる依頼の受付、及び本部がある二の街左区からの依頼の受付なのだが、どうも管轄外の区域からの依頼も多かったらしく、それらの依頼は担当地域の支部に割り振られたそうだ。

初仕事の朝のギルドでの騒動もそうだが、自分が直接引き起こした事ではないとは言え、その原因となったことは否めず、業務外の仕事を増やしてしまった事は日本人としては心苦しい限りだ。かと言って謝ってどうにかなるような事でもなし、私自身に出来ることと言えば仕事を誠心誠意頑張るだけだ。まあ、そういう理由もあって、当分の間は仕事に困らずに済みそうなことは確かである。

そんなわけで、仕事関係には問題はない。では神殿関係か、と言われれば、そちらは神官が相変わらずちよつとしつこいくらいで変わりはない。そう、問題は仕事でも神殿関係でもない。もつと基本的なところに大きな問題が存在していた。

話は変わるが、この国には公の休日と言う概念がない。勤め人なら定められた日に、自営業なら休みたいときに休むと言うのが基本である。暦があり、月や週が定められているが、地球のように日曜日は休み、と言う考えはない。6日間で世界を作り7日目に休んだと言う神がいらないどころか、今尚他の世界から問答無用で拉致を繰り返すような神しかいないのだから仕方がない。そう考えると、嘘か本当かは別として、ユダヤ、キリスト、イスラムの神って案外優秀だったんだな、と思う。まあ、実際には地球を作った神々も初期には異世界からの拉致を繰り返していたらしいが。聞くところによれば、その名残がムーやらレムリア、アトランティスと言った消えた超古代文明の伝説となったんだとか。

話が逸れた。とにかく、この世界、この国では暦は定期的な市の開催日や季節の移り変わりの目安にされるくらいでしかないのだ。

これは長年、週休制の元で暮らしていた私にとっては驚きであり、最も馴染みのない習慣の一つだった。

で、まあ何が問題となっているかと言えば。

想像して欲しい。例えば、急な転勤で海外へ、それも所謂後進国と呼ばれる国へ行く事になったとしよう。そしてそこで休日もなく一ヶ月肉体労働に従事する事になったとしたら？ さて、日頃から運動など特にしてこなかったインドア派と言う名の出不精な人間はどうなるか。しかも、体は子供、体力も当然子供並みでしかない。さあ、ここまで言えば、もう答えは言うまでもないだろう。

私は過労によって療養を余儀なくされていた。

KAROSHIが日本人特有の現象だつていうの、何となく分つたような気がする。何も、異世界に来てまで、しかもブラック企業に勤めてるわけでもないのに、ぶっ倒れるまで働く事は無いでしようよ、私……。不安を紛らわすために仕事に没頭するなんて、なんて素晴らしいワーカーホリック振りだろう。

「こんな状態で仕事へ行かせるわけにはいきません。」

頭ごなしに否定の言葉を投げかけるは、一ヶ月とうが経つまいが未だに良好な関係を築くに至っていない神官である。まあ、過労で発熱、絶賛療養中の身では言い返す権利など欠片も無い。心配してくれているだろうことは分るのだが、どうもこの人とはウマが合わないのか素直に受け取れない。日本にいた頃はこんなにコミュニケーションで苦勞した覚えは無いんだけどな。

「……せめて仕事に行けないことだけでも伝えに行きたいのですが。」

「受注していた依頼は昨日で終わったのでしょう？ギルドの仕事は基本的に個人の裁量に任されます。継続中の依頼がないのであれば、仕事をしない日に何かを伝える必要はありません。」

確かに間違いではない、が……。

「いえ、そこは日本人として連絡を怠るのは……。今まで休み無しでしたからギルドの人も待っているでしょうし。今日は、熱砂の風の方が送ってくださる事になっていたんです。砂蟲退治に向かう道がてら……。」

先に言ったように、ギルド員が私を依頼主の元まで送ってくれると言うのは朝の恒例となっている。それは日替わりで、次は誰、と言う事が既に決まっているのだ。本部を中心に活動しているのは私のような近場の家事手伝い派の他は難易度の高い依頼を請ける上級

者ばかりである。彼らは一度依頼を受けると数日街に戻らない事も多い。だから既に私を送る当番が決まっており、それがあからこそ今まで休みを取りにくかったと言う事もないわけではない。

荒野のオアシス的な街であるエグザードナは街とその周囲の森から離れれば周りは岩砂漠となる。交易都市であるこの街にとって街道の安全は何にも変えがたいものであり、それを脅かす魔物の存在には早急な対処が求められる。熱砂の風は主に岩砂漠での魔物の狩りを中心に行っている集団だ。彼らは街道沿いに出没を始めた砂蟲を狩りに行くのだ。そういう上級のギルド員が何故自分と関わりを持つとするのか、それが一種の願掛けや験担ぎであるようだと言いついていただけに、体調不良だからと連絡もしないのは気が引けた。

「……では早文を送っておきましょう。」

神官が溜息をつき、妥協案を提示する。もとよりまともに動ける体でない事を自覚してはいたので特に反対することなく同意した。

「……すみません。お手数をおかけします。」

「少しでも反省の気持ちがあるのならば、今後は御身を労わり下さい。以前は大人の体だったのでしょうか、現在は幼子と変わらないということをお忘れなく。」

「肝に銘じます。」

どんな理由があろうとも、自分の体調を省みなかったのは私の落ち度だということは否定できない。神官の嫌味も甘んじて受け入れた。神官はそれ以上何かを言うこともなく、静かに部屋を出て行った。

悪い人ではない。今だって、ほとんど足音を立てることもなく、

扉の開閉の音にも気をつける、気配りの人なのだ。なのに、どうしてこうもウマが合わないのだろう。

一人部屋に残され、うつらうつらとしているうちにいつの間にか眠ってしまったのか、気付けば傍にエメラさんがいた。

「起こしてしまいましたか？」

「……私、寝てましたか？」

聞くまでもなく、彼女が入ってきた事にも気付かなかったのだから寝ていたのだろうけど。案の定、エメラさんの答えは肯定だった。

「僅かに。まだ四半刻も過ぎてはおりませんよ。」

「そう、ですか。」

1刻は1時間半から2時間だから、どうやら20分程度眠っていたらしい。エメラさんは静かな声で続ける。

「ナイル様から伝言です。熱砂の風の皆様を中庭までお通しするそうです。」

「え、と？」

その意味の把握に少し時間がかかった。この部屋は中庭に面している、と言う事は……。

「部屋までお通しする事は出来ませんけど、窓ごしならばお話は出来ますよ。」

「……ありがとうございます、エメラ…姉さん」

うつかりさん付けで呼ぼうとしてしまつて慌てて姉さんと続ける。どういうわけか、この人は私に姉と呼んで欲しがるのだ。下手にエメラさんなどと呼ぼうものなら他人行儀だと悲しまれるので要注意だ。他人行儀も何も他人なのだが、まあ一番世話になつてる人であるのは確かなので出来れば悲しませたくはないな、という思いはある。なんにせよ、今回は気付かれずに済んだらしい。

「はい、どういたしまして。でも、お礼はナイル様にもなさつて下さいね。」

あの方が一番気に掛けて下さっているのですから、と言うエメラさんに思わずナイルって誰だっけ、と考えてしまう。えーと、ナイル、ナイル……ああ、あの神官か。そういえばそんな名前だったよな気が。名前で呼ばないからすっかり忘れていた。

「分かりました。」

そう答えると、エメラさんは微笑んで静かに隣の部屋へと向かつて行った。

私の居室は1階にある。それって防犯上どうなの、と思わないでもなかったが、そこは神が直接的な効力を持つて実在する世界、神殿や王宮といった場所はそもそもが神力とやらが満ち溢れている場

所で、そこに害意持つ存在は侵入することは出来ないらしい。

神力とはこの世界に存在する全てをあまなく慈しむ力だとかで、王宮や神殿だから加護があるのではなく、その力を悪用されたりしないためにその力が多くある場所に神殿や王宮を建てたのだと言う。王族はその力を国中に拡散させることが仕事の一つだそうで、だからこそ国中に離宮が散らばっているし、同様にその力を濃いままに人々のために役立てることを旨としているのが神殿であり、こちらも同様に国中に散らばっている。

その神力溜まり、通称聖域に建てられているのが離宮か神殿かは各々の土地によるらしい。更にそれ以外にも例外的な神力溜まりとして精霊や神が直接守護する土地があり、私たち”渡り人”にとっでは関わり深いのだけれど、それについてはまた別の機会に。これら三つの聖域が一ヶ所に集中し、一つの町を形成しているエグザードナはアウトラーシエンのみならず、世界的にも珍しいそうだが、他の国どころか他の町すら知らない私にはまだピンとこない話だ。

居室の位置に関する話から大分話は逸れてしまったが、そんな訳で1階でも安全性は確保されているとのことだ。日本ではアパートでもマンションでも借りるなら2階以上が望ましい、とされていたが、何とも便利な話である。こちらでも聖域外の土地では同じようなものらしいけれど。

そう考えれば、防犯関連に気を取られずに住む神殿内に住めるというのは利点の方が大きいのもかもしれない。まあ、2階以上に住むというのは防犯だけに限った話ではなくて、害虫関係も被害が少なくて済むという利点があったわけだけれど、そもそもこの国、蚊やらGの付く生き物とかを見かけたことがない。日本にいた頃だってGは滅多に遭遇した事なかったから——と言うかアパートを借りて一人暮らしをするまで本当にそれを見たことが無かったのだけれど、そう言うとなぜか学友たちにはあり得ない、と言われたりもした——可笑しくないのかもしれないけれど、日本ほど衛生観念が発達し

ていないこの世界で見かけないということは、そもそも存在していないのかもしれない。この世界に来て1ヶ月、初夏に荷が気候しか知らないから、まだはつきりとした事は分らないけれど。もしかしたらこれから現れたりするのかもしれない、要観察事項だ。本当、この世界は分らないことだらけだ。

とにかく、そんなわけで体力の乏しい私としては喜ばしいことに、1階の広い居室でそれなりの生活を送らせてもらっているわけだ。因みに寝室の他に応接間ともう一部屋を使わせて貰っている。寝室だけで、日本で私が学生時代に住んでいたアパートの1室を越える広さがある、というのはある意味でトリップものの典型例と言えるかも知れない。そんなとこばかり典型例に倣うより、どうせならチートな身体と能力が私は欲しかった……。せめて過労で倒れたりしない程度で良いから。

こんな部屋に住みながら、バイトみたいな仕事でちまちま稼ぐ私って何なんだろうと思ってしまうくもない。私の場合は半ば強制だったけど、こんな生活を続けたら自立する意志が挫かれるというのは納得の話だ。どのくらいここで生活することになるか分からないけれど、出ていくときになって私は本当に大丈夫なのだろうかと余計な心配までしてしまう。あくまで仮宿なのだから、あまりこの環境に慣れ過ぎてしまわないように気を付けなければいけないだろう。

話は戻るが、先ほどエメラさんが言っていた中庭に寝室の窓は面している。部屋に熱砂の風のメンバーを通すことは出来ないが、窓越しなら話しても良い、というのは神官からの最大限の譲歩なのだろう。私が住むこの区画は神殿の中でも奥に属す、そもそもが人の出入りを制限されている場所なのだから、本当に譲歩してくれたのだとよく分かる。勿論、ここが聖域であることと、熱砂の風の面々の信用があつてのことだろうが。

彼らが来るまでの間もエメラさんは私の傍について色々と気を利

かせてくれた。濡れタオルを用意してくれたり、飲み物を用意してくれたり。こちらが悪いと思ってしまっくらいにお世話になった。快復したら、何かお礼をしたいと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495ba/>

マレビット来たりて 前編

2012年1月13日06時49分発行